



指導のメモ

今月は趣向を変えて、新刊書の中から2冊、哲学と自然科学関係のものを選んでみた。哲学というと、わけのわからない抽象的な言葉の羅列で、哲学と聞いただけでアレルギーを起こしてしまうという人も少なくない。そんなわけで、せっかく紹介しても読んでもらえないというのが通例であるが、これは何も読者が悪いのではなくて、書いた人が悪いことは、今日の哲学の衰微とこれに対する哲学者の反省の言葉を聞いてみれば明らかである。例えば高桑純夫氏は、哲学の死命を制する条件として次の二つをあげている。

- ① 時代の人たちの苦悩から問題を汲みあげること。
- ② 問題の取り組みかたは具体的であること。

これに加うるに、表現の明快さをもってすれば、哲学は「万学の女王」の座から転落することもなかったであろう。

今月紹介する「哲学のすすめ」は、これらの条件をすべて満足させる好著で、特に表現がわかりやすいという点、わたしの「要約」が、かえってアレルギーを起こさせるのではないかと心配するほどである。

なお、次に何を讀んだらよいかという問題が出てくるが、わたしは同じ著者の「哲学入門」(有信堂高文社)をおすすめしたい。さらにその先へ進もうという学生の指導にあたって、「哲学の名著」(久野収編 毎日新聞社)が参考になると思われる

ので、これは先生方にご一読をおすすめしたい。なお、ここで注意したいことは、学生たちが、動揺のはげしい、精神形成の過程の上でも重要な時期である青年期中期に置かれていることを十分認識し、さらにわれわれの周囲には、さまざまな対立する世界観のあることを示すことによって、一つの立場に偏することなく、広く、いろいろなものの考え方にしたしむよう指導の展開を考えたいということである。

「ガラパゴス諸島」と併読をすすめたいものに、ダーウィンが、進化論を打ち立てる一つの契機となったこの島々での観察を書いた「ビーグル号航海記」(島地威雄訳 岩波文庫全3冊)、「ダーウィン——その生涯と業績」(駒井卓著 培風館)、「改稿進化論」(徳田御稔著 岩波全書)がある。

*

「武器よさらば」(A Farewell to Arms 1929) E. ヘミングウェイ (1899~1961)

アメリカ自然主義文学はドライザーを頂点として花開いたが、第1次大戦を経て、ヘミングウェイ、ドス・パンス、フォークナーなどのいわゆる「失われた世代」の若い作家たちに引きつがれることになる。彼らは直接、間接に大戦の経験者であり、その中のある者は戦後の幻滅と混沌の中で自滅し、ある者は生き抜いてアメリカ文学の伝統と自己の文学の世界を発見し、次々と問題作を残し

ていった。ことにヘミングウェイは上記の作品で、真実の愛の力を頼りに戦いのもたらした虚無感と絶望に耐えていこうとする人間の悲劇的な姿を、簡潔な、乾いた、いわゆるハード・ボイルドな文体でえがいている。

アメリカ人義勇兵フレデリック・ヘンリーとイギリス人看護婦キャサリン・パークレーはイタリー戦線で知り合い、やがて二人の間に恋がめばえる。その後、イタリー軍がオーストリア・ドイツ軍におされて敗走をはじめ、イタリー語になまりのあるヘンリーは、スパイの疑いを受けて憲兵に捕えられるが、脱走してストレーザーでキャサリンに会う。二人はスイスへ逃れるが、妊娠していたキャサリンは産褥で、出血多量のため死ぬ。

ヘミングウェイは、この他にピューリッツァ賞、ノーベル賞を受けた短篇の傑作「老人と海」(The Old Man and the Sea 1952)、スペイン内乱を背景にした「誰がために鐘はなる」(For Whom the Bell Tolls 1940)などがあるが、とくに前者は、老漁夫サンチャゴとカジキ(魚)との苦闘を通して、主人公の不撓不屈の敢闘精神と、物質を超越した永遠の勝利をえがいている点、「モービィ・ディック」のエイハブと対蹠的である。その意味で両者をあわせ読むようにさせたい。

「武器よさらば」石一郎訳 角川文庫、谷口陸男訳 岩波文庫、河出版世界文学全集一Ⅱ—18」上記作品

ライブラリー

のほか、「老人と海」、「キリマンジャロの雪」その他収録。

*

「哲学のすすめ」岩崎武雄著 講談社（講談社現代新書）

著者は東大教授でカント、ヘーゲルを中心にした近代哲学を研究しており、とくにカントに関する著書が多い。以下は本書の概要である。

要約：人間は他の動物と違って、行為を選ぶ自由を持つ。それ故に、サルトルのいうように「自由の刑に処せられている」といえるし、人生の苦悩は、これから生ずるともいえる。このように人間が行為を選び、その生きかたを決定する根本的な考えかたが人生観ないし世界観という哲学にほかならない。そして、これは人間が「生きる」ということから必然的に生まれるもので、われわれの生活を根底において規定している原理であって、科学が事実判断すなわち事実が「いかにあるか」を問題とするのに対して、これ（哲学）は「いかにあるべきか」という価値判断を扱う。

近世以後の自然科学は、まさにこの「いかにあるか」ということを問うこと、いいかえれば、人間が、人間の経験を越えたものを認識する能力がないということを、謙虚に自覚することにより成立したのであるが、科学、とりわけ技術文明の発達に伴って、人間はこのことを忘れ、あたかも、科学がすべてを解決できるかのように考えるようになり、ついには生命をさへ作りだし、これを支配

できると考えるにいたった。

しかし、例えば人間がタンパク質から生命を発生させたととしても、それは自然の働きによって発生したのであって、人間は単に生命の発生する条件を見だし、それをタンパク質に与えたというに過ぎないのだ。このことを考えるとき、われわれはここに改めて、ひとりひとりの人間のもつ生命——一度失われたら、決して再び作りだすことのできない、かけがえのない人間の生命——に絶対性を認め、価値の基準を見いだすことができるのではないだろうか。

*

「ガラパゴス諸島——進化論のふるさと」伊藤秀三著 中央公論社（中公新書）

著者は 1964 年 1 月、ガラパゴス国際科学事業計画（GISP）による国際探検隊の一員として参加し、植物生態と自然保護を担当した新進気鋭の植物学者である。

ガラパゴスという名は、よく耳にするが、地球上のどの辺にあって、どこの国の領有する島かとなると、案外正確に知っている人は少ない。著者は第 I 章で、まずこの点から説明を始める。ガラパゴスは南米エクアドルの海岸から西へ約 1000 キロ、赤道直下の東太平洋上に散在する 16 の島（エクアドル領）からなる。そして、ここには進化論と生態学の実験室と呼ぶにふさわしい生物相が存在する。ご承知のように、ダーウィンの進化論は、ここでの観察が重要な契機となって完成されたのであ

るが、著者はここでダーウィンの学説の背景となった諸学説、例えば進化を「用不用」という立場からみるラマルクの「動物哲学」、ライエルの「地質学原理」の紹介に続いて、進化論の概要について述べている。第 II 章では、ガ諸島だけにしかない珍しい動植物、例えば世界最小のガラバゴスペンギン、重さ 300 キロ以上もあるゾウガメ、恐竜の孫と呼ばれるグロテスクなウミトカゲやオオトカゲ、爪楊子を使う珍鳥ダーウィン・フィンチ、あるいは菊というイメージからはほど遠い、高さ 20 メートルにも達する菊の大喬木（スカレシア）について述べ、これら生きとし生けるものが、自然の微妙な均衡の上に、“平和”に共存している姿に強い感銘を受けたことを書いている。

第 III 章では、ガ諸島の生物相を考える上で重要な、ガ諸島成因についての 2 説（大陸連絡説——ココス半島説と火山島説）の紹介とガ諸島固有の生物がどのようにして大陸から移住し、進化の過程をたどったかを説明する。第 IV 章では、移入動物（ヤギ、ロバ、イヌ、ネズミなど）の野性化によって、ガ諸島の自然界の平衡関係が破壊されつつある現在、国際的視野に立つ自然全体の保護ということを考え、豊饒な生命の謎を伝えているこれら自然の宝庫を失ってはならないと結んでいる。

〔大田区立蒲田図書館司書 広江健〕